

### 静岡

伊豆の国市の韮山反射炉が構成資産の1つになっている「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録された。静岡県では一昨年度の富士山に次いで2件目、観光が主要産業のひとつである県東部地域にとって長らく待たれていた登録実現であり、心から喜びたい。今回の世界遺産登録決定では、歴史認識をめぐる日韓協議が難航し、世界遺産委員会での審査が1日先送りされる事態があったこともあり、地元関係者の喜びは一入だった。しかし、登録はゴールではなく新たなスタートであると捉えることが重要である。

韮山反射炉は、江戸幕府が幕末、大砲を铸造するために築造した西洋式の溶解炉で、同時期に国内で実際に稼働した反射炉の中で唯一現存するものである。世界遺産登録に伴う誘客効果は既に出ており、昨年1年間の入場者数が10万人だったのに対し、5月上旬に登録勧告を受けた後の1ヵ月だけで4万人を超え、その後も順調に客足は伸びている。登録直後は、平日にも関わらず首都圏方面から団体や個人の観光客が多数訪れ、観光ボランティア

ガイドも多忙を極めていた。また、地域企業も世界遺産登録を記念した事業を展開し始めるなどお祝いムードを盛り上げている。ただ、この効果を単発的なものにとどまらせてはいけない。伊豆地域は、多くの文人・墨客に愛され、美しい情景や風景が多くの作品に表現されてきた。また、自然、動植物、食材、歴史・文学、温泉等の多様な資源を有し、かつどれも魅力的で奥深く、観光地としてのポテンシャルは世界のトップレベルにあることは間違いない。しかし、実際の観光地としての伊豆は、日本や世界の中で際立って輝いているとは言えず、他地域との競争に後れを取りつつある。

現在、伊豆地域では「伊豆半島ジオパーク」も世界認定に向けた活動が行われている。また、2020年の東京オリンピックの自転車競技を伊豆市で開催する計画も検討されている。一方で、富士山の世界遺産登録の際、ユネスコが2016年までに来訪者対策を盛り込んだ報告書の提出を求めたように、韮山反射炉でも、これまで以上に厳格な保安全管理が求められることになろう。こうした状況への対応は、個々の市町単位でなしうるものではなく、地域全体での連携と協力が欠かせない。

伊豆半島の7市6町は、地域の魅力を国内外に発信する「美しい伊豆創造センター」を今年4月に設立した。かつて川端康成は「伊豆序説」において、「伊豆半島全体が一つの大きな公園である」と言った。韮山反射炉、伊豆半島ジオパークなどの古くて新しい観光地、それらに関する歴史や文化、さらに地域の人々や生活を結びつけることにより新たな観光の価値が生まれ、単なる物見遊山の場を超えて真に魅力的な観光地となること。これこそが川端の言う「一つの大きな公園」の実現であるのかもしれない。「伊豆を1つに、世界から称賛し続ける地域を目指して」というグランドデザインのもと、「美しい伊豆創造センター」をはじめ伊豆の各関係者が中長期的な視点に立った地域戦略を練り上げていくことが今こそ求められる。韮山反射炉の世界遺産登録が一過性のイベントに終わらず、伊豆の観光戦略を再構築する大きな契機となることを期待したい。

## 韮山反射炉 「世界遺産登録」!!



見学者が急増している韮山反射炉